

【報告】

(報告) 第53回大学図書館研究会全国大会第2分科会

「医学・医療系図書館における利用者支援」 -実施前および事後アンケート結果まとめ-

下山 朋幸*

抄 録

本稿では、2022年9月16日(土)～18日(月・祝日)に開催された大学図書館研究会第53回全国大会の内、筆者が北海道大学附属図書館(当時)の河野由香里氏と共同で担当した課題別分科会第2分科会(利用者支援)「医学・医療系図書館における利用者支援」について、事前および事後に行った参加者アンケートを中心に報告する。

キーワード：医学図書館、ヘルスサイエンス系図書館、利用者支援、参加者アンケート

1 テーマの選定にあたって(背景と目的)

筆者は、2020年9月より病院を併設した医療研究機関の図書館に勤務している。勤務館では、過去の勤務先でも使用していたPubMedや医中誌Webのほか、初めて使用する医療系のデータベースが複数あり、これまで勤務していた大学図書館との違いに戸惑った。また、入職して間もない頃に利用者より「システムティックレビュー」の作成について相談を受け、「医学系の図書館ではこのようなことを行っているのか」と驚いた記憶がある。

大学図書館研究会(以下、大図研)の会員の中には、元々医学・医療系の大学に勤務している者のほか、異動や転職で医学・医療系の大学・学部図書館に勤務することになる者がいる。そこで、大学図書館に勤務経験はあるが、医学・医療系の図書館の勤務がない、あるいは勤務を開始して日が浅い参加者の支えとなるよう、このテーマを設定した。

2 分科会の構成について

この分科会を行うに際し、まずは話題提供をどなたに依頼するか検討した。

まず、筆者が2021年初頭に参加した日本医学図書館協会(以下、JMLA)病院部会の例会で感銘を受けた千葉県済生会習志野病院の佐藤正恵氏が、その後2021年(第52回)全国大会を機に大図研に入会されたと伺った。そこで、佐藤氏に大図研会員に向けて話を伺えないかと筆者より依頼した。

また、分科会の共同担当者である河野氏の当時の所属先であった北海道大学附属図書館医系グループが、「システムティックレビュー作成支援事業」で、令和3年度(2021年度)国立大学図書館協会賞を受賞したことを伺った。そこで、河野氏と共にこの事業を行なっている川村路代氏に依頼した。

そして、後半は事前アンケートを元に参加者が疑問に思っていることや知りたいことを他の参加

* しもやま ともゆき(国立精神・神経医療研究センター図書館) 〒187-8551 東京都小平市小川東町4-1-1 2023年5月14日受付

者に尋ねるディスカッションとした。

3 当日の分科会について

当日の参加者は、途中からの参加者も含めて30名であった。まずは、趣旨説明の上、参加者間の顔合わせを行った。

佐藤正恵氏には、医学・医療系図書館の総論として、ご自身の経歴や業務で心掛けていること、医療制度の状況について、利用者マーケティングとビジネス・フレームワークについて、そしてヘルスサイエンス系図書館の役割や自己研鑽についてお話をいただいた。

川村路代氏には、利用者支援の具体的な事例として北海道大学附属図書館医系グループのシステムティックレビュー作成支援について、事業の概要のほか、特に「システムティックレビューとは何か」、「新任者にどのように作成方法を伝えているか」という点についてもお話しいただいた。なお、川村氏の当日の発表資料が北海道大学機関リポジトリ「HUSCUP」にて公開されているので(<http://hdl.handle.net/2115/86814>)、参照されたい。

休憩をはさんで、後半は主に事前アンケートの内容を中心に、グループディスカッションを行った。ただ、筆者の段取りが悪かったためか参加者の発言があまりなく、議論が盛り上がらなかった。もっと参加者の意見を引き出せるよう工夫すべきであったと反省している。

4 事前アンケート

分科会を行うに際し、参加申込者に事前アンケートを行った。アンケートの目的としては、参加者が医学・医療系図書館の経験をどれだけ有するかを把握すること、また回答のいくつかは当日のディスカッションで取り上げ、参加者同士で話し合うことであった。

設問と回答は以下の通りであった(回答数15

名)。

なお、文体を敬体から常体に統一したほか、意味を変えない範囲で表現を改変している。また、紙面の都合上一部の回答のみを抜粋している。

設問1. これまでに、医学・医療系図書館に勤務していたことはありますか?

※医学・医療系図書館: 医学部や看護学部など医療従事者を養成する大学のほか、歯学、薬学系も含む。また、大学以外の病院図書室も含む。

- ・現在勤務している 10名
- ・過去に勤務していた(現在はしていない) 4名
- ・勤務したことがない 1名

(コメント)

医学・医療系の図書館の勤務未経験者にも取り組みを知ってほしいという狙いがあったが、実際の申込者は経験者が中心であった。タイトルを見て、医学・医療系図書館の未経験者は参加候補から外したのではないかと推測される。医学・医療系図書館の勤務未経験者の参加を促進するためには、タイトルに工夫が必要であったと思われる。

設問2. (設問1で勤務している、していたと回答された方へ)

医学・医療系図書館に勤務している(いた)期間は通算でどのくらいですか?

- ・1年未満 3名
- ・1年以上～3年未満 2名
- ・3年以上～7年未満 5名
- ・7年以上～15年未満 0名
- ・15年以上～25年未満 4名
- ・25年以上 0名

(コメント)

回答区分の設定としては、「医学・医療系図書館に勤務を開始して間もない者」、「1～2年程度

の者]、「5年前後」、「10年前後」、「20年前後」、「それ以上」というものであった。「7年以上～15年未満」と回答した者がいなかったものの、初心者からベテランまで入り混じった分科会となった。

設問3. 医学・医療系図書館に勤務することになり、困ったことや迷ったことがあればお聞かせください。

- ・併設病院の医員など、多様な身分の利用者の対応が必要となること。
- ・同じ大学図書館といってもかなりこれまでに勤務してきた図書館とは違う特殊さを感じた。
- ・医学系データベースがいくつもあり、使い方を覚えなければならないこと。
- ・他の分野に比べて専門特化しているのでテクニカルタームをはじめとして利用者の意図する専門的内容が理解できるかどうか不安だった。
- ・レファレンスの際、適切なキーワードを想起できるかどうか。事例集を見ているが、勤務開始後現在まで該当学科からのレファレンスが寄せられていないので、実際に検索する機会に恵まれない。
- ・文献収集についてレファレンスを受けた際、国内・国外の学会誌をあたるころまでは思いついたが、分野の専門誌に関する知識がなくて案内に困った。学内で聞ける環境がなく、過去に研修や研究会で一緒にいた別大学の職員に問い合わせた。
- ・除籍の基準がわからない。古いけれど、類似の本が少ない、新しいものが出ていないなど、ないよりあった方がいいのか、それとも除籍していいものか迷う。

(コメント)

回答の結果は、主に「利用者対応に関すること」、「専門用語に関すること」、「レファレンスに関すること」に大別された。医学・医療系の図書館で

の勤務開始後、例えば、医学専門用語、あるいは医療系データベースなど、初めて見聞きするものがあまりにも多過ぎて戸惑った人が多いのではと思われる。

設問4. 逆に、医学・医療系図書館に勤務して良かったことを教えてください。

- ・電子リソースにILL、館内利用を含めて、かなり重用されていて、図書館冥利に尽きる経験ができる。
- ・JMLAの教育体制がしっかりしている。
- ・勉強会など活発に自己研鑽に努める図書館員が多いことを知った。
- ・ILLが活発で、本当に必要な情報を提供しているという実感がある。
- ・COVID-19ワクチン優先接種のような、医療系従事者と同等の医療系支援を享受できる。
- ・医学・医療は専門職としての図書館職員を切実に必要としている分野である。そのような分野の方々の研究に関わることができて良かった。
- ・自身の健康や、身近な医療・介護・福祉政策などへの関心があったので、勤務館で時事的な話題に触れることができたのがよかった。

(コメント)

主に「業務に関すること」と「自身の知見に関すること」に大別された。「業務については、それ以外の館と比較した場合の業務の充実度の高さやJMLAなど業界団体の支援の手厚さが挙げられており、さらには図書館員自身の業務スキルの向上に対する意識へと繋がっているのでは無ないかと考える。

「自身の知見に関すること」では、業務で取り扱う医療や健康に関する情報を自身にも役に立つということであろう。

設問5. (設問1で、「医学・医療系図書館に勤務したことがない」と回答した方へ)

医学・医療系図書館は、一般的な大学図書館や他館種と比べ、どのような特徴や違いがあると思いますか？ イメージや想像で構いませんので、お聞かせください。

- ・扱う資料・データベースなどが特殊。

(コメント)

設問1で医学・医療系図書館の勤務未経験者が1名であったため、回答も1名であった。実際に筆者も医学図書館に勤務する前は過去に同様に感じていた。多くの者は医学・医療系のバックグラウンドを持たないため、このように感じるのであろう。

設問6. ご自身が課題だと思っていることや疑問に思っていること、当日の分科会で他の参加者に聞いてみたいことがありましたら、お聞かせください。

- ・小さい図書館なのでOJTになりがちである。北海道大学のようにシステムティックレビューの検索を担える職員をどのように育成されているのか伺えればと思う。
- ・多様な利用、問い合わせを少ない人数でさばくために行っている工夫や業務改善などがあつたら、ぜひ教えてほしい。
- ・館内でテーマ別の企画展を行っているか。またどのようなテーマで行っているか。医学の専門書ばかりで、企画展示を行うようになってきてはいるが、本が揃わず同じようなテーマばかりになってしまう。
- ・職員の異動が頻繁にあり、薬学・生命科学分野に関する情報提供のスキルを一定レベルに保つことが難しいと感じている。館内業務は委託業者のスタッフが十分に対応しているが、その評価をできる職員がバックヤードにいないと現状維持に陥りやすく、委託スタッフのスキルアップやユーザへのサービス向上につながりにくい

ことが課題と思っている。

(コメント)

この設問に対する回答は様々であり、一定の傾向は見られなかった。また、医学・医療系に限らず他分野の図書館にも起こりうると思われる回答が多数見られた。

設問7. 皆様の所属機関で、分野に特化した(限定した)サービスや支援事例があればお聞かせください。

- ・教職員向けの代行検索サービス。
- ・授業の中の時間を担当し、医学中央雑誌やPubMedの利用法等の講義を行っている。

(コメント)

この設問への回答は、実際に行っている所が少ないためか回答者が2名と少なかった。回答に挙げられたサービスはいずれも行うにあたって十分な専門知識を必要とするため、十分に対応できるか不安に感じていることが、サービスがあまり行われていない理由にあるのかと思われる。

設問8. 図書館(大学図書館に限らない)と医療・健康に関して、関心のあるテーマがあれば教えてください。

- ・予防医学。
- ・在宅での医療・介護。一般の学生・市民が健康医療情報をどのように提供するか。
- ・医療・健康情報問題の本質的なこと(=病、老化、障害などを含めてどう生きるか? 生きるとはどういうことか?)に対する情報支援、ナビゲート。
- ・医療に関するフェイクニュースや、根拠の読み違いによる誤った報道があるなかで、どのように健康被害を防ぐことができるか?
- ・教員・大学院生など研究者への教育活動。実際

にかれらと関わる中で、文献に関わる知識水準の低さが日本の医学・医療研究の水準にも関わる大きな問題だと痛感している。

(コメント)

回答では、例えば公共図書館でも医療・健康情報を扱うところが増えたほか、分科会が行われた前月の2022年8月に「フェイク・バスターズ」という医療に関する情報の信憑性について扱ったテレビ番組が放映されたこともあり、医療や健康情報を取り巻く問題に対する関心の深さが目立った。

設問9. その他、当日の分科会に向け何かございましたらお知らせください。

- ・AMED（日本医療研究開発機構）など公的研究費のRDM（リサーチデータマネジメント）に関与されている方がいたら、話を伺いたい。

(コメント)

医学・医療系図書館では、科研費以外にも様々な種類の補助金を扱うことがあるのに対し、それ以外の図書館では扱うことが減多にないため、あまり他者に相談できない様子が伺える。

事前アンケートを通じて、医学・医療系図書館に勤務する者がどのような悩みを抱え、またどのように感じているかということを知ることができた。大半の者は医療系資格を有していないと思われるため、勤務に際して医学の専門的の習得に苦悩していることは共通している様子が伺える。

5 事後アンケート

分科会の最後の約10分間を用いて、事後アンケートを行った。設問と回答は以下の通りであった（回答数22名）。

なお、事前アンケートと同様、文体を敬体から常体に統一したほか、意味を変えない範囲で表現を改変している。また、紙面の都合上一部の回答のみを抜粋している。

設問1. この分科会に参加しようと思ったきっかけを教えてください。

- ・医学系の図書館勤務が初めてで、勉強になればと考えて参加した。
(他に「医学系の図書館に勤務しているから」という主旨の回答3件)
- ・北海道大学のシステムティックレビュー検索サービスに興味があった（川村氏の発表が聞きたい、というものを含め他に6件）。
- ・最近話題になっている医療情報の取り扱いについて学びたかったため。
- ・日本看護図書館協会で教育研修に関わっているため。
- ・職場で情報共有して活用するため。
- ・コメディカル分野の学部附属する図書館に勤務しているため、どのような利用者支援ができるのか新しい視点が欲しかった。
- ・兼務で薬学図書館に在籍しているので、勉強させていただきたいと思った。
- ・3月に退職して暇になったからということと、演題に興味をひいた。
- ・昨年まで看護学部の図書館にいたことから、数多くの学問分野のうちでも専門的な知識が要求される場所に配属されたらどのようにスキルアップをしていけばいいのか、興味があったから。

(コメント)

主に「医療系の図書館に勤務しているから」という主旨と、「川村氏の発表、あるいはシステムティックレビューについて関心があった」という主旨の内容が目立った。事前アンケートの設問1の通り、事前の広報が医学・医療系の勤務者向け

と受け止められたためと思われる。

設問2. 佐藤正恵様のご発表で、感想や印象に残ったこと、追加でお聞きになりたいこと等ございましたらお知らせください。

- ・司書のキャリアのあり方について深く考えさせられた。いろいろなキャリアがあることを学生にも伝えていきたい。
- ・目の前の業務だけではなく、組織のミッションやこれから進むべきビジョンを明確にするため、幅広く学ばれ行動していく姿勢に感銘を受けた。
- ・経営学の内容を図書館運営に活かしていってほしいのはさすがだと思った。
- ・「ネガティブワードは使わず、ポジティブワードに変換する」を実践していきたい。
- ・医療の地域完結型ということからは公共図書館の果たす役割も少なくないと思うが、大学や医療機関との連携、図書館スタッフの育成ということ課題が多いと感じる。
- ・医療法における国民の責務というのは今日初めて知った。法に書かれているという事実は重いと感じる。
- ・着任したらまず確認することとして作業量の調査などを挙げていたが、勤務して数年たつてくると、進んでいる業務、停滞している業務なども出るので、改めて現状の仕事量の確認をすることが大切だと感じた。
- ・業務の進め方について（まずどのような情報を確認するかなど）大変参考になった。配布資料を見直して、提示していただいた沢山の情報を参考にして今後の業務に役立てたい。
- ・以前に佐藤さんのお話を聞いて刺激を受けたという川村さんと河野さんが、自分の持ち場で新たな花を咲かせているのが素敵だ、と思った。
- ・後進の育成ということを見ると、今回お話を伺ったような内容はぜひ1冊の本にまとめて出版して欲しい。個々の部分的な情報ということ

もあるが、それらがつながりあったひとつのビジョンと言うところが大切ではないか。

- ・図書館の有用性を執行部にアピールする、というのは当館でも求められていることであり、資料購入費や人件費確保のためタイムリーな話題だと思った。ただ、本学の執行部が知りたがっているのは、在籍学生数のうちどれだけの学生が図書館を利用しているのか実数で示せ、というもので、研究支援とはほど遠い活動になっている。大学院博士課程まで持ちながら、学部学生の方しか見ていないような運営で、研究者支援を二の次にしている状況に疑問を感じている。資料購入の決裁も利用状況とセットになっているので、魅力的な資料をそろえて学生を呼び込むのか、学生の利用が活気づけばより有用な資料が増やせるのか、という卵と鶏の話のような状況があり、図書館運営委員会としても苦慮している。

(コメント)

主に「日々の業務に関すること」と「キャリアに関すること」に関する回答が目立ったが、共通して多くの参加者が刺激を受けている様子が目立った。また、佐藤氏の業務やキャリア向上に取り組む姿勢についても感銘を受けたようであった。

最後の回答は、佐藤氏の話聞いて自身の勤務先に応用しようとした際の苦悩が述べられているが、自身への気づきを導いたという効果もあったのではないかと筆者は考える。

設問3. 川村路代様のご発表で、感想や印象に残ったこと、追加でお聞きになりたいこと等ございましたらお知らせください。

- ・システムティックレビューへ図書館員が関与することを業務として位置づけられたことと、継続的に人材育成ができていることが素晴らしい。

- ・ システムティックレビューを行った論文が出版された時に業績として掲載するのは、サービスを受ける側にも安心感を与えられるので真似したい。
- ・ 「成果で黙らせる」が素敵だった。
- ・ 謝辞への掲載を依頼というのは全く考えつかなかった視点であった。
- ・ 依頼者だけではなく図書館員のキャリアへのメリットもあり、お互いに「得をする」という関係が構築できるのは素晴らしい。
- ・ 実際のプロセスや、こういった形式で行っているか（PRISMAフローチャート）などを解説いただき、とても勉強になった。検案件数のためにGoogleスプレッドシートを使えるのは初めて知ったので、今後活用したい。
- ・ 支援をするなかで文献管理ソフトなどを実際に真剣に使う側になったことが、レファレンスなどにも生きてくるというはおそらくその通りなのだろうと思い、普段から使っていると思った（利用者から、実際使ってみてのお薦め度、使用感を聞かれることが多いのと、細かな質問が多いので、勉強不足を感じていた）。
- ・ 平成になったころ、パソコン通信で検索するのが有料で代行検索をよく行った。当時を思い出して、最新の代行検索を聞いた。
- ・ 在職時、利用者への相談活動やシステムティックレビュー/ガイドラインプロジェクトへの参加などは利用者を除けば限られた同僚にしか理解されず、特に最初のころは本当に属人的で孤立的な活動であった。貴学で5人の方が協力してシステムティックレビューに取り組んでいらっしやるのを伺い、心を打たれた。私自身は今も一人で細々と年間数十件程度の相談を受け、年に数件程度のプロジェクトに関わっているが、今回お聴きしたような活動をされている方々がいらっしやることを励みに頑張りたい。
- ・ 文献収集支援について、本学では図書館と司書は当てにされておらず、教員が外部の有料サービスに申し込んでしまっているのが大変悔しい

状況となっている。自身が看護学部にいたときにレファレンスとして受けたことがあるが、自身もスキルが不足に回答できず、付き合いのあった他館の司書に問い合わせざるを得なかった。そのためのスキルを身につけたいと思うが、司書がパート職員しかいない部署では自己研鑽を強制するわけにもいかず、専任司書として自分だけが努力しても仕方がないと思うところがある。

(コメント)

内容のわかりやすさや充実度、あるいはスライドの質の高さについて高く評価する回答が多数あった（ここでは割愛）。それ以外では、成果をアピールすることで評価を得ること、また自身の経験と比較した感想も見られた。

設問4. 後半の参加者ディスカッションで印象に残ったことをお聞かせください。

- ・ 「キャリアはジャングルジムだ」という言葉が印象に残った。進路に悩む後輩がいれば話してあげようと思った。
- ・ どの所属の方でも、悩んでいることは一緒なのだなと思った。
- ・ 看護系のPCC（People/Person Centered Care。市民主導型ケア）というフレームをまず勉強しようと思った。
- ・ 選書のお話は特に医療系では怪しいものもあり、やはり難しいと感じた。
- ・ 「利用者の希望を理解するために十分な時間を取り、自身が理解できるまで何度も説明してもらおう」ということがとても大事に思えた。
- ・ 委託スタッフにとっては依頼者だけではなく専任職員にも疑問点を尋ねられる環境が重要かと思う。専任職員とのコミュニケーションが意外にできていない、難しい例も多いので、まずその辺から考えていただく必要もある。

(コメント)

筆者の準備不足により、当日は期待していたほど参加者からの発言が出ず、沈黙の状態が続くことがあった。それでも、この中で参加者から貴重な発言をいただくことができ、他の参加者が刺激を受けたのは幸いである。

設問5. この分科会を機に、新たに気付いた点や取り組んでみたい点がありましたらお聞かせください。

- ・とりあえず、業務の見直しはしたい。
- ・文献検索研修。
- ・当たり前の話だが、学び続けることの大切さに改めて気付かせられた。
- ・同僚や依頼者との関係性、お互いの利益になる形をいかに作るか。スキル、キャリア構築をどうするか。
- ・システムティックレビューをしてほしいという先生からの要望に、もう少し怯まずに対応したい。
- ・レファレンスで利用者の話していることを30分かけて理解するという、そこまできなくてもあせらないことは心掛けたい。
- ・北海道大学の事例で紹介されていたGoogleスプレッドシートを使った効率化に取り組んでみたい。
- ・アンテナは、もっと広く張らなくてはいけないと学んだ。地方で一人で仕事しているだけでは、時代に置いていかれる。とりあえず、今日学んだことを自分の身にしていく努力ともっと研修会に参加していこうと思った。
- ・少しずつ進めている研究支援について、診療ガイドラインの文献検索支援を図書館として取り組んでいると広報できるようにすすめていきたい。

(コメント)

この分科会で話を聞くことによって、参加者自

身が新たな発見を得て実践へと移したい、という回答が複数あった。この分科会の目標の一つがまさにこちらであり、企画側として喜ばしい限りである。

設問6. この分科会で、改善を要する点がありましたらお聞かせください。

- ・知見が深い司会者のほうで質問に積極的にお答えいただけるとありがたいと思った。
- ・聞きたい質問を事前に投げかけて、参加者の回答をもらっておいてもいい。その場でコメントは、自分的には結構気後れする。
- ・参加者の自主性が少ないのが残念でしたが、司会者の方から、ある程度指名してもよかったかも知れない。
- ・できたら事前に資料をいただきたかった（ご発表のスライドに直接メモをしたかったので）。
- ・参加されていた方の中で認知症へのサービスに取り組んでいらっしゃるなどのお話もできれば伺いたいと思った。

(コメント)

やはり、後半のディスカッションで発言が出にくかった点に関する指摘が目立った。このような事態になった場合の対策を事前に考えておけばよかったと悔やまれる。

設問7. この分科会の満足度をお願いします。（5段階評価）

結果：4.33

設問8. その他、何かございましたらお知らせください。

- ・さまざまなバックグラウンドの方が集まるのが大図研の良さだと再認識した。地区会にも参加してみようと思う。

- ・佐藤さんのお話も、川村さんのお話も、とても素晴らしいお話だった。が、しっかりとキャリアを積めるのも、システマティックレビューをしっかりとできるのも、大学図書館員として、長くないと思えばいられる制度だから、というのものもあるのかもしれない。というのも、常勤の司書は2名しかおらず、それも本庁からの3年という任期限定付きの出向で、大学図書館員としてのキャリアを積もうにも、また教職員や学生の利用しやすい大学図書館づくりに取り組むにも、時間が足りず、知識もノウハウも思想もブツ切りになってしまっていると勤めていて思う。せめて片方だけでも長期で勤められるように制度を変えるか、今のスタイルでもうまく引き継げるよう制度を作るかだと思い、日々頑張っている。なので、今日は「やっぱり図書館員は長くいた方がいい」と再確認でき、元気をもらえた。
 - ・システマティックレビューや検索相談に取り組んでいる方と大図研を通じて連絡が取れればよいがとかねてから思っている。
 - ・看護系の学科からのレファレンスがとにかく少ない（昨年度は1件、今年度はまだ0件）という状況の中、調査回答によって自分のスキルを高める、成果を相手に理解していただくということが非常に難しい。今後どうすればよいのが大きな課題。
- 設問9. 最後に、あなたは図書館に関わる人として（図書館勤務でない方は今のご自身の立場で）どんな社会貢献ができますか？
（医療や人々の健康とは関連のないものでも構いません）
- ・図書館や司書の役割をできるだけわかりやすい言葉で（子どもにも）伝えていきたい。
 - ・個々の人や機関が抱える課題に寄り添う。図書館として「正しい情報はこれですよ」と提示するだけではなく、一緒に考えながら（可能なら活動を共にしながら）徐々に軌道を変えていけるような活動ができればと思う。
 - ・自分に届いた情報を情報エントロピーの低い状態にして次につなげること。
 - ・何か知りたいことがあるとき、頭の中を整理するための話の聞き手となり、必要な情報を効率的に手に入れるための道案内役として役立てると良い。
 - ・図書館実務を仲間とのパートナーシップを作りながら行い、関連の研究を進めること。
 - ・市民の皆様に、地域医療の仕組みとヘルスリテラシーと情報リテラシーを伝えていきたい。
 - ・QOLに直結する情報が多く発信されている中、誤った見方や悪意のある情報から自衛するためのスキルを勉強し、広めたい。
 - ・図書館をしっかりと整備していくことで、より民主的で開かれた社会に貢献できると思っている。
 - ・佐藤さんと同じく「読者の時間を短縮せよ」は仕事中は常に意識している。情報を取り扱うものとして、身の回りの人が困っている際には情報の収集の仕方や正しさの見極め方などを伝えようと意識している。
 - ・現在、公共図書館と連携し、地域の高齢者と学生とのつながりを生む場を作るため、イベントや講座を企画している。これらの活動が持続的なものになっていけるよう、貢献していきたい。
 - ・図書館勤務時代も含めて、市などのボランティアに参加している。献血も18歳から続け、その後血液の値が悪くできなくなるまでおこなった。
 - ・まずは、学生・教員への質の高いサービス提供を心がけることで、リテラシー能力？を持ち、学び方を知っている医療者を増やしていければいいと考えている。
 - ・大学のカリキュラムを熟知し、学生や教職員が利用したい資料へと橋渡しすること。
 - ・医学図書館で勤務しているので、医学教育に少しでもお役に立ちたい。まだ研究支援までは、

なかなか知識が追いつかないところだが、学部生の学習支援として文献検索などの講習会等を通して、図書館が学習、研究に役に立つ場所だということを、(人生の) 色々な課題解決の糸口となりうる場所であることを知っていただきたい。

(コメント)

この質問の意図としては、筆者はかねてから「図書館に関わる一人として、自身の立場で社会に何が貢献できるのか」ということを考えていた。そこで情報について、特に医療や研究情報について取り扱う立場として、参加者にはどのような社会貢献ができるのかを尋ねてみた。参加者の属性上、情報リテラシーやヘルスリテラシーの向上に関する回答が多かったが、その中で具体的な内容は様々であり、各自ができることを活かして貢献し

ようという意味が伝わった。

6 まとめ

筆者はこれまで「別の分野での図書館で勤務経験がある者向けの、医学・医療系図書館の講座」を見聞きしたことがなく、このような会があれば良いとかねてから考えていた。本分科会では、それを実現できる形となった。

今回の分科会を通じて、参加者が刺激を得て、それを元に新たな行動を移すこと、そして図書館員として(あるいは各自の立場で)自身を取り巻く環境を良くするという目的を果たすことができたと思われる。

改めて、共同担当者の河野由香里氏、発表をいただいた佐藤正恵氏・川村路代氏、そして当日の分科会参加者の皆様に深く御礼を申し上げる。

“User Support in Medical and Health Science Libraries” - 2nd Group Session in the 53rd Annual Meeting of the Japanese Academic Library Association: Summary of Participant Survey

Tomoyuki SHIMOYAMA

Library, National Center of Neurology and Psychiatry,
4-1-1 Ogawa-Higashi, Kodaira, Tokyo 187-8551 Japan

Keywords: Medical library, Health science library, User support, Participant survey
